特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ

茨城県民の皆様へ

私たちは下記の構想を茨城県にとって有益な平和プロジェクトとして提案します。
ご理解と賛同よろしくお願いいたします。

特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ 住所：〒300-0213 茨城県かすみがうら市牛渡 1796-1
名誉会長　服部英二　：　元ユネスコ事務総長特別顧問・文化担当特別事業部長
会　長　大野遼　元メディア記者　　理事長　江藤セデカ/（特非）イーグル・アフガン復興協会理事長
副会長　井口隆太郎/(株)井口産業社長　　副理事長　浦川治造/東京アイヌ協会名誉会長
副理事長　冨川力道/モンゴル・ブフクラブ代表

加藤九祚（九さん）プロフィール

九さんは、韓国慶尚北道出身。五族協和の共栄圏を夢見て応召。大東亜戦争敗戦後、5 年間に及ぶシベリアで、バム鉄道建設などの強制労働に従事させられながら、ロシア語を身に着けて、抑留から帰国後、シベリア・中央アジアをフィールドとする研究者に転身。考古学、民族学、言語学などの多くの著作、論文を世に出し、作家井上靖氏や考古学者江上波夫氏の支持を受け、日本の学界の「狭いアジアから広いアジア」の学術情報のニーズに応えて活躍。かつて岡倉天心が東アジアの基層文化に焦点をあて「アジアは一つ」と言ったのに対して、加藤先生は NHK 市民大学で「ユーラシアは一つ」と発信した。ユーラシアという世界に通底する物質文化、精神文化に看過しがたい時空を超えた交流のあったことを、抑留されたソ連で活躍していたロシア人研究者との面談、著作・論文を踏まえて発信した。梅棹忠夫・国立民族学博物館館長から同館教授として招聘され、国立民族学博物館名誉教授。大佛次郎賞、南方熊楠賞など受賞。ロシア科学アカデミー歴史学名誉博士となった。

国家民族宗教を超えて
民族の共生・自然との共生を模索
特に少数民族・先住民族にウェートを置いて

「ユーラシアは一つ　太陽地球村＝シルクロード文化村」を茨城県に設置したい

「昔があるから今がある」「貴方がいるから私がある」「生きているのはとにかくいいことだ」―加藤九祚。

私大野遼は、加藤先生の後背を拝し日本ではじめて「ユーラシア」の名を冠する二つの団体「北方ユーラシア学会」と「ユーラシアンクラブ」を創設して今日に至ります。

旧ソ連崩壊前の 6 年間、加藤先生ともう一人の加藤先生（『マンモスハンター』で知られる旧石器研究者加藤晋平さん/千葉県出身）のお供をして、ソ連邦ノボシビルスク郊外にあるアカデムゴロドク（ソ連科学アカデミーシベリア支部のある学術都市）を訪問し、多くの研究者と知り合いになり、シベリア、アルタイ山脈の考古学調査による出土品を見学し、多くの遺跡を視察した。その一端は、メディアの記者としていくつかの連載記事や特派員報道を執筆し、北方ユーラシア学会事務局長としては、林俊雄氏が主宰する草原考古学研究会の協力で「アルタイ・シベリア歴史文明展」をプロデュースした。またウラジオストクあるソ連科学アカデミー極東支部の考古学民族学研究所のクルシャーノフ所長に手紙を出して、研究所と北方ユーラシア学会の学術交流の希望を伝えた。数か月後、遊覧船で晴海ふ頭に来る予定のあることが伝えられ、船で面会。研究所で面会

することが決まり、後日、坪井清足・奈良国立文化財研究所長、シベリア先住民族の先行研究者荻原真子東京国際大学教授（当時）と一緒にウラジオストクを訪問し学術交流協定を交換した。以上の交流の一端はこのニュースレター前号で記した。加藤先生とソ連科学アカデミーシベリア支部の A.P.デレビャンコ先生（加藤九祚記念館協力委員）の間の深い友情と信頼という絆が、ユーラシアの窓を開けた。加藤九祚先生が切り拓いた道をたどるように、シベリア・アルタイそして中央アジアの研究者と日本の研究者の学術交流の扉は開かれた。

今の日本は、この絆をもっと評価して欲しいと願う。「貴方がいるから私がいる」。シベリア抑留をシベリア留学と受け止めてシベリア・アルタイ・中央アジアをフィールドとする加藤九祚が日本の学界に現われたから今がある。

● 「ユーラシアは一つ」は、1987 年 NHK 市民大学「北・中央アジアの歴史と文化」の理念

世界には、加藤九祚先生が提唱した「ユーラシアは一つ」という理念が必要である。それは、「ユーラシアユニオン」や、東京裁判で日本人の被告全員無罪を論告したインド出身のパール判事による「世界連邦」の願いにも通じるものだ。

力によって勢力（縄張り）拡大を図り、「力が正義」が横行する世の中を克服して、世界の少数民族や先住民族、国家民族宗教の境を超えて異文化に敬意を表することは、ユーラシアや世界の相互理解に役立つと考えています。ユーラシアの理解親睦協力の促進を模索する拠点を日本に創設することが、世界の平和と安全、人権と人道主義の促進に役立ちます。加藤九祚先生生誕 100 年とユーラシアンクラブ創設 30 周年を記念し、服部英二元ユネスコ事務総長顧問・文化事業責任者を加藤先生を継ぐユーラシアンクラブ名誉会長にお迎えし、アジアやユーラシアの平和と安定に利する「加藤九祚記念　ユーラシアは一つ　太陽地球村＝シルクロード文化村」創設プロジェクトに取り組み、運営主体として「ユーラシア文化センター」設置を提案します。そこに「加藤九祚先生顕彰碑」も設置したい。

●「太陽地球村＝シルクロード文化村」の理念とイメージ

理念は　国家民族宗教を超えて「ユーラシアは一つ」

提唱者・加藤九祚（日本国外務大臣表彰）

—国家民族宗教を超えて、理解親睦協力の促進を模索する。特に先住民族少数民族にウェートを置いて
—「今」は「大国」と呼ばれていても、「先進国」と呼ばれていても、「昔」があるから「今」がある。
ユーラシア・アジアの先住民族、少数民族、歴史・文化・多様性に敬意を。

※ ユーラシアンクラブは、加藤九祚先生を顕彰するプロジェクトとして提唱する。

※ 茨城県は、日本の世界に対する平和戦略として、日本政府と世界に提案する。

※ そこに行けば、「地球村＝文化村」では、居ながらに、①国家民族宗教を超えたユーラシア・アジアの芸術文化体験ができる。②交流事業を実施する。③国家民族宗教も「昔があるから今がある」ことを理解する場所にする。④運営事務局として「ユーラシア文化センター」を創設する。（詳細は、ユーラシアンクラブの 30 年の活動を踏まえ多岐にわたる）

※ そこに行けば、ユーラシア中の観光文化情報が入手できる。

※ これは、茨城県が誇りを持って日本政府に働きかけて、国家プロジェクトとして、世界に協力を呼び掛けて、在日大使館、文化交流団体、歴史文化研究団体の協力を得て実現する。

● 今後「太陽地球村＝シルクロード文化村」実現のために協力者・プロジェクトチームを呼び掛ける

○ なぜ茨城県に創設したいか

・成田と筑波大学の中間に創設する。人の流通と学術拠点の中間に「文化村」を創設する。

・茨城県は、『常陸国風土記』及び『逸文』で、大化改新の時設置された「常陸国」に遡り、元「日高見国」すなわち「日出国」と呼ばれた。中国で、古代王朝・殷の時代から 10 個の太陽を毎日、東の空に送り出した神樹は「扶桑の木」と呼ばれ、「東海の海中」にあった。この神樹「扶桑」は、天照大神（太陽神）が鹿の姿で降臨した鹿島神宮が臨む太平洋（鹿島灘）にあったと想定される。「天孫族の北九州渡来とともに筑紫地方へ、さらには神武東征とその百数十年後の崇神による大和朝廷確立とともに、近畿地方へと「扶桑」が転移したという構図」（宝賀寿男）から見て、大和朝廷の勢力が常陸国（大化改新で設置。中臣鎌足の封土/久慈郡が置かれ縁・鹿島神宮がある）に及んで常陸国は扶桑国になったと考えられる。中臣鎌足から藤原不比等四兄弟の時代に遡り、常陸国風土記の編纂者は、不比等の第 3 子で常陸国司をしていた宇合とされる。常陸国は、東海道の終着に位置し、「天神」系（ニニギノミコトとニギハヤヒ）以来の東国侵攻の歴史が中臣・藤原氏に転換した時期で、今の日本の基層文化を形成した時代だった。奈良から馬で常陸国に達した伝駅使（はゆまづかい役人）は「信太郡榎浦の駅家（茨城県竜ケ崎市付近）」で鹿島神宮に向かい口と手を洗い清めて初めて常陸国に入ることができた—。奈良時代以前から「日出国」とされた茨城県はユーラシア最東端の日出国の歴史を有している。

【日本古道紀行】から引用加工

近江俊秀『海から読み解く日本古代史』朝日新聞出版 2020 年　に加筆

　ダイヤモンド富士の向こうに日出国・茨城県がある。霞ヶ浦からは夕日に浮かぶ富士が見える。ユーラシアには、シュメールのウトゥやエジプトのラーや中央アジア起源のミトラ・ミスラ・ミフル・ミル、ミャオ族や東夷・殷代の十日神話の扶桑。私が 30 年通ったアムール川のナナイの村を初めシベリアの少数民族も、サハ共和国も、そして日本も、太陽の物語あるいは太陽信仰は人びとの精神的支柱になっている。

　易経が語源となる「一陽来復」の心は、太陽信仰の原点であり、地球上の命の安定と平和への希望の源流だと思っていますが、この素朴な太陽信仰は、ユーラシア大陸の東端では、東海の海中にある扶桑樹から姿を見せる日の出への希望に重なります。太陽に敬虔な気持ちになるだけでは間に合わない世界の現実ですが、太平洋・鹿島灘から昇る初日の出に希望を託し「ユーラシアは一つ」と発信したい。茨城県はユーラシアの平和と安定を祈念する文化村」を設置するのに適した、世界平和プロジェクトを推進するのにふさわしい東海の日出国である。